

○研究発表要旨 ディケンズとポー

水野 隆之

エドガー・アラン・ポーはチャールズ・ディケンズの作品の書評をアメリカ国内で発表した最初の人物である。ポーがディケンズの作品を愛読し、ディケンズを敬愛していたことは広く知られており、ディケンズが1842年に渡米した際には彼に面会を求めたほどであった。ポーはディケンズ作品の書評を数編発表した。そこから読み取れることは、ポーが短編作家としてのディケンズを高く評価していたことである。

本発表では、まずディケンズとポーの個人的人間関係を概観したうえで、ディケンズの影響が顕著に表れているポーの作品として「群衆の人」を取り上げる。『ボズのスケッチ』に収録された作品と「群衆の人」の比較を通してポーが「群衆の人」を創作するにあたり、如何にディケンズを参考にしたかを考察するとともに、「群衆の人」は当時ディケンズの最新作であった『骨董屋』の影響を受けていた可能性があることも明らかにする。

Shakespeareの初期作品にみるartifice — *The Comedy of Errors* 再考—

小山 誠子

*The Comedy of Errors*は、*Henry VI* 等一連の歴史劇の前後である1590年代前半に書かれた劇作家習作期の作品の一つに位置づけられており、その主要な材源とされるローマ喜劇作家Plautusによる*Menaechmi* 等との連続性と同様に、作中における聖書に関連した言及も多数確認されている。

本発表では、イングリッシュ・ルネッサンスという時代背景および創作／上演をめぐる周辺状況に注目しつつ、聖書の『エペソ人への手紙』にある「従順」「服従」の主題を取り扱い、Plautus作品との対照と、主人公の双子のうち一人であるEphesusのAntipholusの妻Adrianaを中心に、Shakespeare作品においては数少ない「妻の（夫婦関係の）」物語として作品を考察する。